

鴨 東 通 信

秋

2013.9 No.91



●日常語のなかの歴史5

こけら

平井俊行

●てーたいむ

企業史を越えて―『住友の歴史』刊行に寄せて

朝尾直弘・安国良一・末岡照啓

●エッセイ

施薬院と安藤精軒・中村正勁

八木聖弥

正倉院裂の思い出

尾形充彦

「名庸」の由来

中本 大

●リレー連載 世界のなかの日本研究15

韓国出土の日本近代陶磁

鄭 銀珍

●史料探訪

佐々成政禁制（岡崎家文書）

萩原大輔

講座 日本茶の湯全史

茶の湯文化学会創立二〇周年記念出版 全三巻

近年、茶の湯の歴史的 연구は、著しい展開とともに、テーマは多岐にわたり詳細をさわめている。

本講座は、日本文化史の中に位置づけられた茶の湯の展開を、茶の湯文化学会が総力をあげ、最新の研究成果をふまえて通覧する。茶の湯の成立から近代までを見通した初めての通史。

さらに深く茶の湯研究を志す人にとってのハンドブック的な要素もたせる。

◎編集委員会◎

代表 熊倉 功夫

影山 純夫 (静岡文化芸術大学学長)

竹内 順一 (神戸大学名誉教授)

田中 秀隆 (水青文庫館長)

谷端 昭夫 (大日本茶道学会副会長)

中村 修也 (湯木美術館学芸部参与)

中村 利則 (文教大学教育学部教授)

美濃部 仁 (京都造形芸術大学教授)

(明治大学国際日本学部教授)

▼四六判・各巻 平均三三〇頁

第一巻 中世 [6月刊行]

第二巻 近世 [今秋刊行予定]

第三巻 近代 [7月刊行]

定価二、六二五円

定価二、六二五円

定価二、六二五円



野村得庵の文化遺産

野村美術館学芸部編

野村證券を中核とする野村グループの創始者・得庵野村徳七は、一代で野村財閥を築き上げた大実業家であると同時に、茶の湯・能楽にも全身全霊で打ち込んだ偉大な数寄者であった。

本書は、野村美術館設立30周年記念事業として、野村得庵の文化活動に焦点を当て、各分野の第一人者が論文集の形でまとめる伝記。

『野村得庵』全3巻以降新たに発見された史料や最新の研究動向をふまえ、新たな得庵像を提示する。

カラー口絵16頁
ごあいさつ

序文

得庵と碧雲荘 (中村昌生)

得庵の古画蒐集 (河野元昭)

得庵の能楽再考―『野村得庵』以後の知見を中心に― (天野文雄)

得庵の茶の湯再考 (谷見)

得庵の建築 (矢ヶ崎善太郎)

得庵蒐集の美術工芸品について (守屋雅史)

得庵と煎茶―碧雲荘内「北泉居」煎茶節記を中心に― (船坂富美子)

《翻刻》野村得庵筆藏帳『文房具・煎茶器』 (船坂富美子)

得庵と近代画家 (松尾敦子)

棲宜荘建築図面の復元 (柚木憲一)

【8月刊行】▼A5判・五〇六頁／定価三、一五〇円



こけら【柿】

平成二十五年四月二日の新聞に、「老朽化のため三年間の建て替え工事を終え、五代目として生まれ変わった東京・銀座の歌舞伎座が二日、こけら落とし公演の初日を迎え、新開場。新たな歌舞伎座の歴史が始まった」との記事があった。近年とみに建築用語が日常のなかで使われなくなっていると感じている。「子は銚^{かすがい}」、「うだつがあがらない」など、そのものを見たこともない若者にとっては、言葉としても使いようがないのだろう。そのなかでしばしば目にするのが「こけら」である。いつも決まって舞台や劇場などの新装後の公演は「こけら落とし公演」といわれている。

日常的になじみはない「こけら」である

が、右のように用いられるため、何とはなく工事後の屑を払い落とす程度にとらえられているようだ。そもそも「こけら」とは、「柿（音読みハイ）」と書く。「木」偏に、「巾」の上に「二」を乗せる「市（音読みフツ）」を書く。果物の「柿（カキ）」とは別字である。意味は、木の細片。削りくずの木片。こっ

日常語の歴史 なかの歴史

5

◎日常語のなかで、歴史的語源やエピソードを取り上げ、研究者が専門的視野からご紹介します。

ばのことである。すなわち「こけら落とし公演」とは、工事で発生した木の削りくずの木片を払い落として、初めの公演のことである。

この「こけら」の語は、歴史的な建造物の修理に当たっている我々の世界では日常的に用いられている。現在では京都や奈良など古都以外ではほとんど目にする事が出来なくなっている「こけら葺き」である。意味はもちろん木の薄い板で葺かれた屋根のこと。日本の建物は、古代から木材やその樹皮を用いた植物性屋根材が多く用いられていた。近世、江戸で最大の火災とされる明暦の大火（一六五七年）で大きな被害が出ると、以後幕府は、屋根の不燃化に取り組み、こけら葺きの屋根は瓦葺きへと大きく変化していった。

我々は建造物の修理をするだけでなく、その技術・工法等を広く国民に知ってもらうことが、昔からの言葉を残すことにつながることを肝に命じ、これからも仕事に当たりたい。

（平井俊行・京都府教育庁指導部文化財保護課建造物担当課長）

——『住友の歴史』上巻が刊行されました。本書の刊行は朝尾先生の発案だそうですね。

朝尾…わたしはずっと新しい歴史の領域の開拓を考えていました。いまや歴史学は行き詰まりを見せていると感じます。

新しい領域を具体化するためには、それはすべからず現代につながる歴史でなければならぬと思います。それから、生活上の諸事実から何をくみ取るか、いかにそこに光を当てるかという問題を忘れないことです。

本書は目次立てから叙述までこうした問題意識が貫かれています。だから、「住友の歴史」という書名から、住友の財閥形成史とか、企業史を想像されると面喰ってしまうかもしれません。

末岡…わたし自身は、住友に勤めてもう四〇年近くになります。今回執筆の中心となったメンバーはみなそれくらいの間、この住友史料館で住友の史料と向き合ってきました。

そのメンバーで最初に手掛けたのが『住友別子鉱山史』（一九九一年）で、その後が『住友林業社史』（一九九九年）でした。それらには書き足りないところがあった。そう思っていた

ていーたいむ

企業史を越えて

——『住友の歴史』刊行に寄せて——

あさ お な お ひ ろ
朝尾直弘
(住友史料館館長)

やすくに りょう い ち
安国良一
(同館副館長)

す え お か て る あ き
末岡照啓
(同館副館長)

ところで、朝尾先生から課題・方法論を与えてもらったと思っています。

今回の本は、朝尾先生が立てた目次ありきで始まりました。つまりわたしたちは、まずお題を頂戴し、執筆を始めたわけです。だから普通の社史だったら、「住友の始まり」から編年で書いていくところを、テーマに沿ってそれぞれ通時的に書くことになりました。

これは住友の特徴ともかかわっています。三井や三菱などほかの商家なら、いつ何があつてどれだけ儲けたというような経営史的な資料となる帳簿があるのですが、こうした一貫した資料が住友にはありません。ですからそもそも財閥形成発展史的な叙述はむずかしいのです。

朝尾…それから、なぜ今の時期に刊行に踏み切ったかという点、『住友別子鉱山史』の執筆に携わったものたちが経験を積み、こうした本をまとめることを考えると、今しかなかったのです。いまを逃すとみな定年を迎えてしまいうすです。

平成一一年にわたしが館長として就任した時、ここにはこの二人に代表される、円熟期を迎えようとしていた研究者がいた。研究者にも組織

にもいい時期というものがあるのです。ただ毎日史料調査をしているだけではもったいない。世間様に対しても申し訳ない(笑)。充実した時期にきちんとした仕事をやらしてもらおうと思ったのです。これがわたしがここにきて最初にやろうとしたことです。

●主体的な歴史の叙述

朝尾…この住友史料館では、日々の業務として史料調査・研究をしています。これほど研究に打ち込んでいる組織は、日本中探してもほかにありません。うちは具体的な史料について一字一句まで追求して、しかもそれを毎年『住友史料叢書』として活字にして発表しています。先ほど、生活上の諸事実を拾い上げると申しましたけれど、わたしたちほど細かい事実の追究に、日夜、職業として取り組んでいる研究機関はないですよ。

末岡…住友では、明治三年に日常使っている資料を提出しなさいという決まりができて、以来、史料編纂が日常の業務になったのです。もうその通達が出てから一〇〇年以上たちます。それがこの住友史料館で保管・公開している史料です。

朝尾…だから歴史の編纂を特別にやっているわけではなく、日常そのものが歴史の編纂なのです。

安国…今だったら、株式会社は営業報告書を株主のために作りますよね。住友ではそうではなくて、自分たちの歴史を編纂するために事業報告書を出



朝尾氏

しなさい、ということでは歴史史料の編纂が始まったのです。これまで、住友の外部の方が書いた、特に明治以降の、まさに財閥形成史的な本がありました。しかし、江戸時代からの歴史を通覧できるものはありませんでした。だから、創業から現在につながる長い目で見通せる本を書こうというのも、今回の目的の一つでした。

実はこの本は、着手してから一〇年以上かけているのです。はじめのころはいわゆる重厚長大な何巻本にもなるような本を作ろうという話だったのですが、途中で、やはり読みやすいものでなければ、「現代につながる歴史」である意味がないと考え、方針を変えました。「我々の歴史」を社員のみなさんに読んでもらわなければならぬということで、今回のような上下二巻にまとめ、手に取りやすい本にしたのです。

朝尾…どこことなくお経のような装幀になりました(笑)。

末岡…住友の初代政友は文殊院嘉休もんじういんかきゅうという法号を持つ宗教者ですからふさわしいですよ。

それから財閥形成史的な叙述をすると、結局、財閥とか企業グループの歩みはどこもある程度一緒ですから、十把一絡げな内容になってしまふ。するとそれは主体的な歴史ではないのです。三井や三菱と似たところもあるけれども、住友にはこういうところがあるというのを出すためには、みずからが主体的に書いていかなければだめ

だと思っています。今回は住友で長年研究してきたわたくしたちが書いていますから、主体性は出せていると思います。

そしてもう一つは「住友精神」が宿るものでなければならなかった。読んだ人に勇気がでるような、そういう本にしたいと思いました。文殊院の思想は、現在に続く住友の事業精神に引き継がれています。

——本書は近世の銅山事業に多くのページを割いています

朝尾…鎖国にいたる経過はどうか、キリシタン禁令が出て云々というわかりきった話で書き進めていくのは、ごく表面的な話であって、歴史というものは、人々の心に響くようなものがあるべきだと思います。

安国…つまり大航海時代から鎖国へというありきたりの記述ではなくて、それを住友がやってきた銅の歴史と絡めて考えたらどうか、ということですね。

朝尾…それから、近世から住友が経営した別子銅山の細かい話や、その銅の積出港である新居浜の港市としてのありかた、銅の質をめぐる問題、そんな細かい事実をどうまとめれば歴史になるのか。それが、本書を作るにあたっての大きな課題でした。

末岡…みなで議論したことは、鉱山とか銅の精錬という専門的すぎる問題をどういう風に一般の人にもわかってもらうか、興味を



安国氏

持ってもらふかということでした。それについては、やはりわたしたちが長い時間この仕事に取り組んできたからできたのだと思います。

朝尾…近世という時代は偉い時代だったと思います。原始・古代から中世をへてつづいてきた重たい古いものを押しのけて、近代を生み出した。この本では近世という時代のしんどさ、ものすごさ、歴史を地べたの一番低いところから動かしたエネルギーを表現したかった。

末岡…財閥というのは何からできているかというと、三井も三菱も古河も藤田も住友もすべて鉱山業から出発しています。そのなかで住友だけが唯一江戸時代からやってきた。江戸時代に、銅山業の矛盾、苦しさ、問題点などをすべて知っていたわけです。近代の問題点というのが江戸時代に経験できていた。だからグローバル化にも対応できたと思います。

——下巻は来夏刊行予定です

朝尾…普通なら下巻は近代化とそれへの対応、となるのでしょうか、本書はそうしなかった。

末岡…ありきたりな近代化の叙述にはしたくなかったのです。特徴を一ついえば、失敗の歴史もきちんと書いていくということです。たとえばいかに近代化に成功したように思われているかもしれませんが、案外近代化は遅れていました。産銅業界の中で電

気製錬を取り入れたのは一番遅かった。近代化はゆっくりしていたのです。

ほかと比べた場合の特徴は、あまりたくさん鉱山を買わなかったことです。借金してまで山を買おうとはせず、ほぼ別子銅山一本でした。だからこそ、地域との結束力が生まれたのだと思います。「信用を重んじ確実を旨とす」という経営理念そのもので、あえて時流に乗らないところがあった。それは見方によっては反省点の一つだったとも思います。

安国…保守的だし、近世からのしがらみや負の側面も抱え込んだまま近代化せざるを得なかった面もあります。

●住友の歴史に学ぶ

末岡…住友は、近世から労働者を抱え、労働者を大切にしてきました。そういう近世的な部分を抱えながら、近代化をしてきたのです。その姿勢はいまも変わらないかもしれません。

たとえばいまでも、近世からごく最近までの殉職者の慰霊をやっています。それから白水会というグループ各社の社長会があって、毎年四月にお参りすることになっています。お参りのために各社の社長が一堂に会するというのは住友だけだと思います。

アーリー・デ・グースという石油メジャーの口



末岡氏

イヤルダッチシエルの研究員が、企業の永続について調べた際に世界の社史を読んだそうです。最終的に世界から永続企業を一〇社選んで四つの特徴をあげました。それは①政治変革、技術変革など環境変化に敏感である、②結束力がある、③権限の自由度、④あまり借金をしない、ということだそうです。これらは住友の家法に含まれていてすべて当てはまります。ちなみに日本の企業は最終的な一〇社の中に三社が残り、それは三井、大丸、住友でした。

この三社に共通する点をわたしなりに考えますと、それは惣墓があり先祖をまつっているということだと思います。つまり歴史に学ぶということが大切なのだと思います。

安国…もちろんそれは必要条件であって、十分条件ではありません。結局は社員の意識にかかっている。だから主体性を持った経営をしていかなければならない。この本をずっと編集してきて、改めて読み返してみると、そのように感じました。

朝尾…企業が長くつづくためには何が大切なのか、この本が考えるきっかけになるのではないのでしょうか。

(二〇一三・八・二六 於…住友史料館)

せやくいん せいけん まさたけ
施薬院と安藤精軒・中村正勁

八や 木ぎ 聖せい 弥や

貧富の差が激しく医療保険制度がなかった時代、だれしもが病気になるれば病院に行けるわけではなかった。家族の手当てを受けることができたとしても、多くはなすすべなく痛苦を抱えながら短い命を終えたのである。そうしたなかで救いの手をさしのべたのが安藤精軒であった。

精軒の名を知ったのは、京都府医師会の前身である京都医学会の成立事情を調べていたときであった。彼は医学会設立反対派の半井澄を説得しようとしたが、激論となって相手を殴打し負傷させたという。半井は京都府医学校の校長、療病院の院長をつとめたほどの人物である。権威に屈せず力尽くでも自説を主張しようとした精軒とはどのような人なのか興味がわいた。

幕末から維新にかけて勤皇家として鳴らした精軒は、施薬院を再興するなど慈善事業に生涯をついやしたことがわかった。儒学者頼山陽の水西荘（山紫水明処）を一時所有し、そこで貧しい人々のために無料診療を始めたという。頼家が山紫水明処を手離していたとは驚きであるが、そこが施療の場として利用されていたことはもって驚きであった。水西荘はまもなく頼家に戻され、治療

場は知恩院に移された。

精軒が水西荘を入手したのは偶然ではなかった。養父安藤桂洲ともども梅田雲浜と懇意にしており、雲浜は山陽の子三樹三郎と親交が深く尊皇攘夷の行動をとみにしていた。おそらく精軒は山陽亡きあと雲浜の紹介で水西荘を譲り受けたと思われる。幕末には歌人橘曙覧がここを訪れた。曙覧と精軒とは親戚である。水西荘を宿所に借りた曙覧は、大田垣蓮月尼に会いに行く。蓮月晩年の主治医は精軒であった。明治初年には、画家の富岡鉄斎が三年間ここを精軒から借りて住んだこともある。鉄斎が蓮月に養われたことは有名である。鉄斎は施薬院再興に協力している。精軒の人脈が交錯する。

施薬院は当初精軒の自費でまかなわれていたが、経営は行き詰まり初代京都市長内貴甚三郎の協力をあおいだ。内貴は面会さえ拒んだが、精軒は内貴邸の門戸を蹴破っておしり直談判におよんだ。ここでもやはり強引な手段にでた。

自分にとつては一銭の得にもならないことに、なぜそこまで情熱を傾けることができるのであろうか。医師ならば人を救いたい

と思うのは当然かもしれないが、施療のため名利をもとめず清貧に甘んずる精軒に心ひかれていった。

精軒のご子孫である加藤静允先生きよのぶが京都市左京区で開業しておられると知り、眼科医の奥沢康正先生にご紹介いただいてお宅を訪問した。加藤先生は陶芸家としても名高い。書齋でお話をうかがったが、あれほど清々しい時間を過ごしたことはなかった。くわえて精軒直系の酒井民子様をご紹介いただき、酒井様から精軒ゆかりの資料をご寄贈をいただいた。人への惜しみない優しさは、脈々と受け継がれていた。

施薬院はその後、聚楽病院跡地じゅうらく（七本松通丸太町上ル）に移転される。もと上京区公立避病院である。資金は久原房之助はなふさが提供した。現在その東半分には洛和会丸太町病院が新築中である。明治初年から現代にいたるまで医療施設として継続されることは意義深い。西半分は京都市中央図書館などになっている。

昭和にはいつて施薬院の運営を一手にひきうけたのが中村正勁である。正勁は施薬院創設当時から医員として名をつらねていた。それというのも、精軒は施薬院を始めるにあたって協力者をもとめていたが、なかなか無報酬で手を貸そうとする人はいなかった。そこで頼った先が種痘医中村四郎であった。四郎もかねて施療を実践していたからである。事情を理解した四郎は、養子の正勁と良淳りょうじゅんに手伝わせる約束をしたのである。

四郎のご子孫とも連絡をとることができた。滋賀医科大学名誉教授の細田四郎先生である。細田先生のご子息三人はすべて医師

で、三男の正則先生は宇治市で開業しておられる。そのHPに中村四郎が先祖であると書かれていた。お二人とも府立医大のご出身で、くわしいお話をうかがうことができたばかりか、貴重な資料までお送りいただいた。研究のためとはいえ、見ず知らずの者に快く応じてくださった度量に感謝するばかりである。正勁の手柄が偲ばれる。

昨年、担当する教養ゼミに澤井慎二君がいた。彼は京田辺市の澤井家に連なるとのことで、重文に指定されている澤井家住宅について研究発表をした。そのさい、澤井家がだされた本を参考にした。私家版なので借覧すると、系図のなかに正勁の名を見出し大変驚いた。正勁が澤井家の出身であることは公にされていない。ご当主の澤井公和先生も府立医大のご出身で開業しておられる。縁とはまことに不思議なものである。

このほど上梓する『近代京都の施薬院』は、施薬院創設からおよそ五〇年間の歩みをたどったものである。前半は精軒、後半は正勁が中心となるが、多くの人々の支えによって施薬院が運営されたことも事実である。慈善事業は医療保険制度にかわったが、扶助の精神は一貫しているともいえよう。そして、今回の著作もまた多くの人の善意によって形となったことを痛感するのである。

（京都府立医科大学准教授）

正倉院裂の思い出

私は、長く正倉院裂の整理・修理・調査に携わってきた。気持ちの上では、私の人生は正倉院裂と共にあった。正倉院に勤め始めた頃の思い出を自省の念を籠めて綴ることにしたい。

昭和五十四年（一九七九）十月一日付の発令で奈良市雑司町（東大寺大仏殿の裏手北西）の宮内庁正倉院事務所に勤務を命じられた私は、爾来三十四年間、同じ染織整理業務に携わっている。平成十九年九月に現在の鉄筋鉄骨コンクリートの新庁舎へ引っ越すまで、重い取っ手の付いた厚い扉、凝った鑄物の金具に縁取られた観音開きの窓やリノリウムを張った床など、昭和初期の佇まいを残す旧庁舎で約二十八年間を過ごした。

私の主な仕事は、絹や麻の朽損し腐蝕した微妙な臭気を発する正倉院古裂や塵芥と称される裂地小断片を分類・整理・調査することである。研究職として採用されたので古裂帖を製作したり伸展した古裂を仮張りに掛けるような修補作業はなかったが、大変地味な仕事をしていたと言えよう。松本橋重著『正倉院雑談』（奈良観光事業株式会社出版部、一九四七）に「仕事は申し分なく貴いが、地味なことまた極端だから」とある通りであった。

尾形充彦

さらに、およそ文化系の学問をしないままで現場に入った私は、事務所内で日常的に交わされる諸先輩の言葉の意味が理解できず、メモをしておいて帰宅してから辞書を引いて知ることもあった。文化財世界のいはば本丸御殿である「正倉院」に採用された意味を知らないで、古裂の糸目や織り密度をルーペで見続ける仕事を砂を噛むように味気なかったことを覚えている。つまらなそうに仕事をしていると容赦なく「他の人達は大学で勉強したことをそのまましていればいいのに、君は大学で関係のない勉強をしていたのだから正倉院では使いものにならない」と面罵されて、重苦しい気持ちになった。

正倉院に勤め始めて一年もしないうちに大学の大先輩に京都の祇園を連れ回されてほとんど飲まなかった酒を何軒も梯子（やから）をして飲むようになり、酒を飲み歩いて仕事をサボる輩だと正倉院の研究職の上司や先輩の評判は最悪だった。父にも「他の人達は苦労に耐えて頑張っているのが分からないのか」と言われて、こんな事ではだめだと奮起しても、古裂をひたすら見る毎日は精神的にかなりつらく、最後は酒に流される日が多かったことが思い出

される。

私が古裂整理の仕事をした頃、東大寺では昭和の落慶法要が大々的に催され、大仏殿前では連日雅楽の演奏や伎楽の行列などの行事が執り行われ、大仏殿の屋根からまかれた泥金^{きんぎょ}絵の散華が正倉院の敷地に舞い降りたり（昭和五十五年十月）、また、正倉院展が二十二年振りに東京国立博物館で開催され、選り抜かれた一五四点の宝物が東京へ運ばれて大盛況であったり（昭和五十六年十月）、当時、正倉院の周辺は華やいだ雰囲気包まれていたが、孤軍奮闘していた私には華やいだ記憶はほとんど残っていない。

振り返ると、安逸に流れやすい私にとっては、自分の目で見て自分の頭で考えざるを得ない仕事環境は苦しいながらも為になつたように思う。私に文化財研究の素養が少しでもあれば、自分のわずかな知識の範囲内で他の研究をそのまま受け入れた論文を書いたことだろう。私は当初文化財のことを知らなかったので、自分の五感だけを頼りに、あらゆる研究に批判の目を向けながら調査研究を進めた。周囲の人達には取り付きにくい研究者に映ったかもしれない。ひたすらルーペで古裂を見て、自分の判断で他の研究の優れたところだけを評価し続けた。

そのような生活もそろそろ限界に近いと思われた十五年目に「正倉院の大幡」『正倉院年報』第十八号（一九九六）を書いた。この論文は諸先生方にご評価をいただくことができ、自分もようやくスタートラインに立つことができたと感じたことが今も忘れられない。曲がりなりにも研究者になれたのは、ご指導いただ

いた諸先生方をはじめ先輩や同僚の皆さんのご理解と寛容の賜物と感謝している。

還暦が近い今でも、古裂調査に対しては意欲的な気持ちで対処することができ。それは、おそらく、若い頃にひたすら古裂片と格闘したこと、の賜物に違いない。正倉院裂を前にして逃げ出さずに頑張っただけの報いはあったと思っている。

現在、文化財染織品保存修復の世界は、私の時代と様子が変わろうとしている。最後に、そのことに少し触れておきたい。

一九六〇年代頃から大学で美術史や保存科学を学んだ後、海外の専門教育施設で染織品修復技術を学んで修復師などの資格を得たキュレーター（そもそも博物館学芸員の意味であるが、我が国では研究者というより修復技術者のように扱われることがある）と称される人達が増え始め、今ではかなりの人数が文化財染織品保存修復の専門家として活躍している。彼らは、研究職員と修補作業職員を兼ねる存在である。論文を書き自ら修補作業も行う。海外の博物館ではもはや役割分担が進みつつあると聞くが、我が国では保存修復の新しい職域として注目されている。まだ職人氣質が残っている正倉院の修補作業現場にも、早晚新しい風が吹き込むと私は考えている。

（宮内庁正倉院事務所保存課整理室長）

「名庸」の由来

中なか本もと大だい

寛文四年（一六六四）四月五日、相国寺長得院主・菊隠慧叢きよくいんえそう所有の『名庸集』という名の典籍が、鳳林承章ほうりんじやうしやうの手を経て後水尾院に献上された。院は喜色満面、しばし歓談に及んだことが、鳳林の日記『隔葉記』同日条に記されている。『隔葉記』にただ一度だけ登場する『名庸集』について、その全容を紹介する影印と解題の執筆を終えた今、心残りが一つある。広汎かつ特異な人名集成である本書の表題の由来を明らかにし得なかったことである。

相国寺慈照院に伝来した『名庸集』の外題は「名葉集」と墨書されている。代々の所蔵者も、内題に記される「名庸」の由来を正確に伝承していなかったのだろう、見慣れない措辞を避け、「人名を集成した書物」の意で「名葉」の字を当てたものと考えられる。もちろん「庸」と「葉」とでは平仄が異なるので、通用させたとは考え難い。

「名庸」の由来は何なのであろうか。

そもそも「庸」字の第一義は『説文解字』が記すように、「もちいる」の意味である。さらに敷衍して「つね、一定」の意味に

なり、それが反転して「なみ、あたりまえ」の意でも用いられるようになった。本義を踏まえ、『名庸集』解題では「常用すべき人名録の意」との見解を示した。そもそも命名者も不明で、これ以上推測を重ねても意味はない。不毛な贅言を加えることはあえてしなかった。

書名の由来と関係するかしないか、定かではないものの、『名庸集』と同じ寛文四年に成立した「書を手がかりに、少しばかり『名庸』に関する妄言を述べることにしよう。

近世初期の寛文年間、五山学僧や儒者の想起する「庸」字イメージの一つに「中庸」があったと考えて間違いないまい。『易経』に見える「文言曰、庸言之信、庸行之謹」に対する疏（注釈）で「庸は中庸を謂う。庸は常なり」とされるのをはじめ、「中庸」の「庸徳之行、庸言之謹、有所不足、不敢不勉（庸徳之れ行い、庸言之れ謹み、足らざる所あれば、敢えて勉めずんばあらず）」なる一聯は、朱子学を敬慕する中国文人によって広く親しまれた。『中庸章句』にも「庸、平常也」と記されており、「庸」が「常」の意で解されていたことは明白である。その理解は本邦文人にも継

承され、林鷺峯が「邇言抄序文」(『鷺峯先生林学士文集』巻第八十四・序四所収)で「伝曰、庸徳之行、庸言之謹、言顧行、行顧言」と引用するのはその好例である。

『邇言抄』とは鷺峯の序文によれば、丹波亀山藩主・松平忠晴が編纂した備忘録であつた。注目されるのは、この序文の末尾に「甲辰孟夏上旬」と記されていることである。「甲辰孟夏」は一六六四年四月、鳳林が『名庸集』を後水尾院に献呈した時期と同じなのである。

表題に見える「邇言」とは、いにしえの賢帝・舜が身近でわかりやすい言葉や表現を尊んだことに由来する表現で、やはり『詩経』や『中庸』などに見出せる。舜帝が「邇言」を好んだことと、「平凡」の意に通じる「庸」字を用いて儒教道徳の境地を示す「中庸」という語を生み出されたことは、決して無関係ではない。なればこそ、鷺峯は『邇言抄』の序文で、『中庸』を用いて藩主・忠晴の営為を称揚したのである。

「中庸」がヘーゲルの弁証法におけるアウフヘーベンとは似て非なるものであることはよく知られている。中国哲学の難しい議論に入ることは避けるものの、鷺峯が弘文学院学士となった寛文三年十二月から数ヶ月後、鷺峯・鳳林承章という儒・仏それぞれの実力者が、「庸」に関連する表題をもつ書物と関わっていたのは興味深い符合であろう。問題は「名庸」に儒書の影響をどの程度見出すべきか、という点である。

室町時代に五山学僧が提唱した三教一致は、あくまで「仏」を

中心に据え、「儒」と「道」を収斂させようとしたものであつた。『燈分集』という別書を仕立て、「仏」の要素を切り離した『名庸集』からは、室町時代の五山学僧が目指した三教一致の理念は見出せない。存在するのは「儒」と「道」のみで、中国明代類書人物部門をほぼ踏襲した人名配列は、常套的とは言うものの、儒教重視の姿勢が極めて明白である。「名庸」の「庸」が「庸言」や「庸徳」と同じ「常」の意味で、私に推察したように「名庸」が「常用すべき人名集成」の義であることに疑いの余地はないものの、そこにとどの程度、儒書の影、否、弘文学院学士林鷺峯の影響を見出すかによつて、『名庸集』の性格は全く異なるものになると考えられる。鷺峯が尊重した『中庸或問』の著者・山崎闇斎が会津藩主・保科正之に迎えられたのは寛文五年である。妙心寺の湘南宗化に学んだ闇斎は土佐で修学し、その学問的系統は五山文壇と距離があつたと考えられる。

寛文年間、闇斎の活躍を知る五山僧がどのような思いで「庸」字を選んだのか。それを解明することは、後水尾院の晩年、最後の輝きを放っていた五山文壇の文学史的意義を検証するための重要な鍵になると考えているのである。

(立命館大学文学部教授)

韓国出土の日本近代陶磁

鄭 じょん銀 うん珍 じん

朝鮮半島のやきものは、高麗王朝時代（九一八―一三九二）にいわゆる高麗青磁が出現してひとつの黄金時代を築いた。つづく朝鮮王朝時代（一三九二―一九一〇）には高麗茶碗が日本にもたらされ、千利休以来、茶の湯で珍重され続ける。高麗茶碗はたんに在来品が日本に流入しただけでなく、中期には日本側から形などを指定して積極的に注文し、生産させた。しかし朝鮮王朝の末期すなわち近代に至ると、やきものを巡る両国のこのような関係が逆転する。王朝の窯業が衰退のきざしを見せていたなかへ、いち早く近代化を遂げつつあった日本の陶磁器が大量に流入し、それがまた朝鮮の窯業に打撃を与えたのである。なお、陶磁器は大きく分けて美術工芸品的なものと日用品的なのがある。このうち日本から大量に流入したのは後者であり、韓国ではこうしたものを、産業化された陶磁器という意味でしばしば産業陶磁と呼ぶ。

近代韓国の陶磁研究は、二〇〇〇年以降、大きく進展している。それ以前は、おもに朝鮮総督府の窯業政策や朝鮮美術展覧会、日本人による高麗青磁の復興などについて研究がなされてきたが、朝鮮総督府の報告書その他にもとづいて、たんに日本の陶磁が流

入したために韓国の窯業が衰退したと説明されるのみだった。ところが、二〇〇一年に韓盛旭と片山まびが共同で執筆した「靈巖南海神祀出土の日本銘文白磁瓷」（『博物館年報』第一〇号、木浦大学校博物館）は、流入したのがどのような日本陶磁だったのかを、出土品を用いながら具体的に示し、たとえば韓国人の好みに合わせたものが肥前や岐阜から輸出されたことなどを明らかにした。

このような研究が可能になった背景には、韓国国内の近代遺跡から日本の近代陶磁が出土し、研究機関が注意を払い、その報告が増加するようになっていたという事情があった。つまり、日本近代陶磁の出土陶片が資料として認識され、活用されたのである。なかでもっとも大きな発見が、二〇〇八年に行われたソウル東大門運動場での発掘調査である。一九〇八年から一九二五年に至る時期のゴミ捨て場跡から、朝鮮時代の陶磁や中国陶磁とともに、とりわけ日本の近代陶磁が大量に出土し、全三三・四七点の陶片のうち二七・一六六、全体の八四・九パーセントを占めていた。この出土量の多さが韓国陶磁研究者の注目を集め、それまで見向きも

されなかった日本の近代陶磁が、大学でも授業のなかに取り入れるようになり、若い研究者が研究を始める契機となった。

二〇〇九年には、近代陶磁の全貌を示そうとする展覧会「うつわ、近代を盛る…近代産業陶磁器」が仁川市立博物館で開催され、十九世紀末から二十世紀半ばまでの韓国産および日本産の産業陶磁を中心としつつ、朝鮮王室ゆかりの美術工芸品および関連資料あわせて一四〇点が展示された。美術品ではない産業陶磁に重点をおいた展覧会は、韓国では初めてのことだった。さらに二〇一一年には東大門運動場遺跡にかんする報告書が出版され『東大門運動場遺跡 東大門歴史文化公園敷地発掘』、尹昭羅が概要を（「サッカー場廃棄層出土近代陶磁器」）、張南原が韓国内の窯業の変化と日本陶磁器の受容を（「19世紀後半～20世紀前半の日本陶磁の国内受容」）、片山まびが日本での生産地を整理した（「1870年～1920年代韓国に輸出された日本産業陶磁器——生産地を中心に——」）。

これら近代の産業陶磁のうち、日本産のものがどこで、いつ、またどのような物が生産されたのか、ひとつの重要な研究テーマとなっている。しかし、十九世紀後半以降に始まった日本の海外輸出陶磁器にたいする日本の研究は、おもに欧米の博覧会での展示品やそれに関連したジャポニスムを巡ってなされ、アジア向けの、とりわけ産業陶磁にかんしては研究が皆無といってもよい。むしろ逆に、韓国側で出土しているという事実にもとづいて、日本製品が朝鮮半島にも輸出されたと推定している状況である。し

かし近年、以上のように日本近代陶磁の韓国への輸出状況や、日本国内での生産状況が少しずつ明らかにされつつあり、筆者も最近、日本から韓国への輸出状況や、日本国内での生産地を従来よりも詳細に論じた（鄭銀珍「日本近代産業陶磁の朝鮮半島への進出」『立命館大学考古学論集6』、二〇一三年）。そのなかで一例として、肥前と瀬戸・美濃の製品が互いに競争しながらも棲み分けていたことを明らかにした。

朝鮮王朝末期以降の窯業の衰退は、地方に散在していた庶民の日用品の面だけで起こったのではなく、王室の器を製作していた分院と呼ばれる官窯も、この時期に機能を停止して崩壊した。近代産業陶磁の研究は、近代における韓国窯業の全体像を明らかにするうえで、基礎的知見を提供することになるだろう。またそこでは日韓両国の研究者の協力が不可欠であり、資料面のみならず研究方法等でも交流が進み、互いにとって大いに刺激となることが期待される。

（大阪市立東洋陶磁美術館学芸員）

史料

探訪

(53)

佐々成政禁制（岡崎家文書）

萩原大輔

（富山市郷土博物館学芸員）

富山市郷土博物館は、昭和二十九年（一九五四）四月に戦災復興事業の完了を機に開催された、富山産業大博覧会の記念建築物として建設された。三重四階建ての城郭を模した建物で、開館以来、半世紀にわたって郷土富山の歴史と文化を紹介する活動を行ってきた。来る平成二十六年には、開館からめでたく還暦・六〇周年を迎える、富山市直営の人文系博物館である。今回紹介する史料は、昨年度に当館へ寄贈された「佐々成政禁制」（岡崎家文書）である。岡崎家文書は、総数二十三点に及ぶ家伝文書で、現状は二巻仕立てとなっている。岡崎家は、富山藩の十村役を代々務め、同藩領内でも有数の高持百姓であった。

本題の史料紹介に移ろう。まず釈文を掲げる。

禁制 本郷

一 濫妨狼藉事、

一 放火之事、

一 不謂儀申懸事、

右条々堅令停止訖、若於違犯

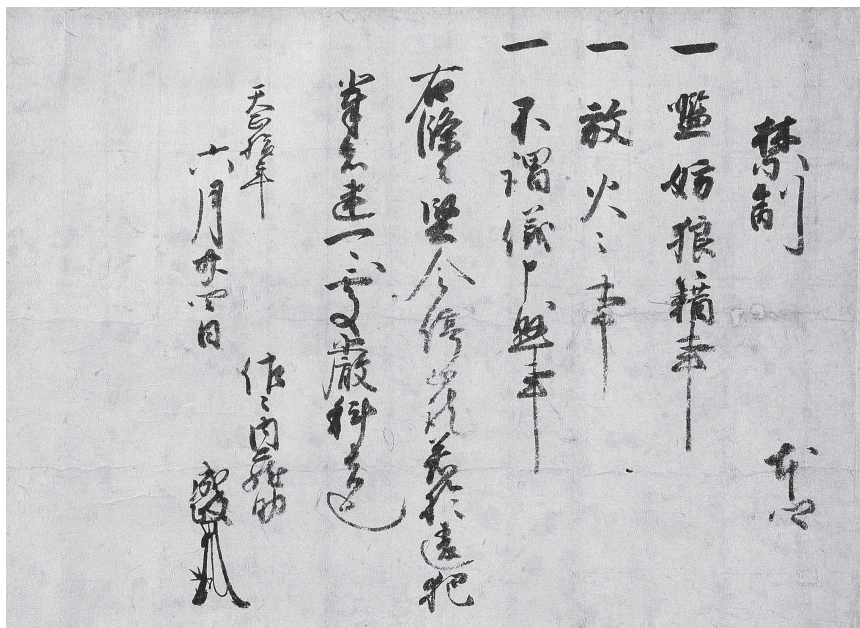
輩者、速可処嚴科者也、

天正拾年 佐々内蔵助

六月廿四日 成政（花押）

料紙は堅紙形式で、寸法は縦二九・七×四二・五センチ、保存状態は良好である。発給者の佐々成政は、織田信長の家臣として戦功を重ね、黒母衣衆、越前「府中三人衆」、越中国主へと出世を遂げていく人物である。天正八年（一五八〇）十二月頃には、越後の上杉景勝に対する織田軍の最前線指揮官として富山へ派遣された。その後、信長から越中一国の支配権を委ねられ、上杉軍掃討戦を進めていく。ところが、翌十年六月二日、主君信長が明智光秀に突然討たれる「本能寺の変」が起こる。

この禁制は、乱暴狼藉、放火、無理難題を申し付けること、の三か条を禁止するもので、内容的にはさして目新しくない。むしろ注目すべきは発給日で、本能寺の変からわずかしか経たぬ時期に、成政が越中国婦負郡本郷村（現富山市婦中町）へ交付したという点である。当該期の政治過程に関しては、藤井讓治編『織豊期主要人物居所集成』（思文閣出版、二〇一二年）の発刊によって格段に理解しやすくなった。そこで、禁制発給前後の成政をめ



佐々成政禁制（富山市郷土博物館蔵）

ぐる状況を素描してみよう。

信長が没した六月二日、成政は柴田勝家・前田利家らとともに、上杉方の拠点・魚津城（現富山県魚津市）を攻撃中であつた。近年紹介された柴田勝家書状によると、翌三日、魚津城を攻め落とした後、成政は東進し越中境（現富山県朝日町）を攻撃、五日の夜には上杉軍を越後へ撤退させている。こうしたなか、翌六日に本能寺の一報が伝わるのである。成政ら織田軍が夜中に撤退を始める一方で、能登・越中に残る上杉方の国人たちは動きを活発化させた。たとえば、有澤図書助は信長の死を機に、織田方から寝返つたらしく、「被覆先忠、越府江御馳走、無是非次第候」として、上杉氏から所領を宛行われている。かような事態に対処すべく成政は、富山城から兵を繰り出し、小嶋国綱・寺島盛徳兄弟の手勢を打ち破り、その余勢を駆って一気に湯原国信の陣を攻める。しかし、佐々名字の者三名のほか計百余人が討ち取られる敗北を喫した。結果、六月十六日までに、上杉方が富山城を奪回するにいたる。なお、能登に戻つた前田利家も、国内の情勢不安から、柴田勝家から来た上洛要請を断っている。

右にみたごとく、本能寺の変からわずか二週間で、越中情勢は劇的に変化する。上杉方の猛反撃によって、織田方は越中東部をほぼ失うかたちとなつたのである。そして、成政が苦境に立たされるなか発給されたのが、今回紹介した六月二十四日付の本郷宛禁制なのである。翌二十五日には、まったく同内容の三か条禁制が蓮華寺に交付されている。蓮華寺は当時、婦負郡長沢（現富山

市婦中町)に所在する寺院であつた。つまり、婦負郡域が戦場となることを予想した、本郷村や蓮華寺などの村落・寺院から禁制発給の要望がもたらされ、成政はそれに応えるかたちで交付したと考えられよう。この「佐々成政禁制」の背景には、まさに戦国越中の混沌とした軍事情勢が横たわっていたのである。

さて、富山市郷土博物館では現在、特別展「戦国越中の覇者 佐々成政」を開催中である。決して知名度が高いとはいえぬ戦国武将・佐々成政について、県内外の歴史資料などから、その生涯をたどろうという野心的な展覧会である。今回紹介した「佐々成政禁制」も展示しているので、この機会にぜひ実物を間近で御覧いただきたいと思う。

(1) 岐阜市歴史博物館図録『織田信長と美濃・尾張』八〇号「宮下玄 覇氏所蔵文書」。

(2) (天正十年) 六月九日游足庵宛上杉景勝書状写〔『増訂加能古文書』補遺三八九号「平木屋文書」〕。

(3) 天正十年六月二十七日有澤図書助宛須田満親判物〔『上越市史別編2 上杉氏文書集』二二四二八号〕金沢市立玉川図書館所蔵有沢家文書〕。

(4) (天正十年) 六月十九日直江兼統宛湯原国信書状〔『上越市史別編2 上杉氏文書集』二二四一五号「伊佐早謙文書(東大影写)」〕。

(5) 萩原大輔「天正年間中期の富山城」〔『富山史壇』一六一号、二〇一〇年) 五〜六頁〕。

(6) (天正十年) 六月十七日柴田勝家宛前田利家書状写〔『新修七尾市史3 武士編』六三三号「中村不能齋文書」〕。

— MEMO —

富山市郷土博物館

富山県富山市本丸1-62

TEL 076-432-7911

ホームページ <http://www.city.yamanakajima.jp/etc/muse/index.html>

・JR北陸本線「富山駅」より徒歩10分

・入館料 一般200円、小中学生100円

※特別展会期中は、料金が異なります。20名以上の団体は2割引

・休館日 年末年始(12月12日〜1月4日)

なお、展示替えやメンテナンスによる臨時休館があります。

・開館時間 9時〜17時(入館は16時30分まで)

【展覧会案内】 2013年9月14日(土)〜11月10日(日)

特別展「戦国越中の覇者 佐々成政」

佐々成政に関係する、県内外の歴史資料30数点を展示公開。当時の人々から「武者のおおへ」(武士の鑑)と称されながら、波乱に満ちた生涯を送った成政、その実像に迫る展覧会。

・おもな展示史料

「佐々成政像」(法園寺蔵)、「佐々成政所持刀」(成願寺蔵)。

「伝佐々成政所用 采配」(護国八幡宮蔵)、「佐々成政書状」

(照願寺蔵)、「家忠日記」(駒澤大学図書館蔵)

・特別展入館料 一般400円、小中学生200円

※20名以上の団体は2割引

書評・紹介一覧 7～8月掲載分		※(評)…書評 (紹)…紹介 (記)…記事〔敬称略〕
医療の社会史	神仏習合の歴史と儀礼空間	
(紹)『日本歴史』第783号	(紹)「神社新報」(津田勉)	
祇園祭の中世	戦国大名権力構造の研究	
(評)(紹)『日本歴史』第783号(大塚活美)	(評)『歴史学研究』第907号(矢田俊文)	
近世上方歌舞伎と堺	戦国大名佐々木六角氏の基礎研究	
(評)『日本歴史』第782号(萩田清)	(評)『ヒストリア』第239号(新谷和之)	
(紹)『日本史研究』第611号(矢内一磨)	茶の医薬史	
近代の「美術」と茶の湯	(紹)プログ「SCENERY」	
(紹)「茶華道ニュース」8/15	茶の湯と音楽	
講座 日本茶の湯全史	(記)「読売新聞」(朝刊)8/1(塩崎淳一郎)	
(紹)「歴史人」ウェブサイト	(記)「茶華道ニュース」8/1	
(紹)「東京新聞」(夕刊)7/11(三品信)	復活!不昧公大圓祭	
(紹)「中国新聞」(朝刊)7/14	(紹)『月刊美術』第455号	
(紹)「朝日新聞」(朝刊)7/21	平安時代貿易管理制度史の研究	
(紹)「毎日新聞」(東京本社版)(朝刊)8/10	(評)(紹)『日本歴史』第782号(田中史生)	
(紹)「茶華道ニュース」8/15	老僧が語る京の仏教うらおもて	
(紹)「読売新聞」(夕刊)8/20(木須井麻子)	(紹)「教界通信」8/15	
(紹)「文化通信」8/26		
(紹)『遠州』第567号		

7月から8月にかけて刊行した図書

図 書 名	著 者 名	ISBN978-4-7842	定価	発行月
中華民国の誕生と大正初期の日本人	曾田三郎著	1695-6 C3022	6,825	7
老僧が語る京の仏教うらおもて	五十嵐隆明著	1683-3 C1021	945	8
近代日本の歴史都市 古都と城下町	高木博志編	1700-7 C3021	8,190	8

7月から8月にかけて刊行した継続図書

シリーズ名	配本回数	巻数	巻タイトル	ISBN978-4-7842	定価	発行月
講座 日本茶の湯全史	2	3	第3巻 近代	1698-7 C1076	2,625	7
新島襄を語る		別巻3	八重の桜・襄の梅	1699-4 C1016	1,995	7
住友の歴史	1	1	上巻	1703-8 C1021	1,785	8

(表示価格は税5%込)

▼9月8日まで東京国立博物館で行われていた「和様の書」展をみた糸井重里さんが、「ほぼ日刊イトイ新聞」に寄せた文章が印象に残っています。

それらの書は「できる」と思っ書かれてるのだろう、というのです。

「できない」と思っ書くのではなく、「できる」と思っ書く。その差がおのずからあらわれてくるのでしょうか。

本づくりやその販売も「かたち」を生み出す点では同じ。「できる」と思えば見えてくるものもあると思うのです。(h)

☆学会出店情報

※出店学会・出店は変更の可能性有

日本史研究会（京都産業大学）

10/12（土）～13（日）

地方史研究協議会（金沢市文化ホール）

10/26（土）～27（日）

日本医史学会関西支部総会

11/10（日）

日本近世文学会（三重大学）

11/16（土）～17（日）

歴史科学協議会（佛教大学）

11/16（土）～17（日）

▼朝尾先生の壮大な構想のもと編纂された『住友の歴史』は従来の企業史のイメージを覆す試みで読み応え十分。住友関係者・新居浜市民のみならず、ぜひ一読ください。そして一年後の下巻もお忘れなく！(M)

▼最近久方ぶりに銭湯通いを再開。これまで住んでいた所は徒歩5分圏内に銭湯があったのに現在は無銭湯地帯のため、少し歩かないといけないが、秋の夜長にのんびり通うのも◎。湯あがりの1杯には乙な味わいが。(大)

▼『近代京都の施薬院』は国民皆保険ではなかった時代に医療がどういう形で行き渡ろうとしていたのか、草の根の葛藤(?)が垣間見られる一書となっています。(m)

▼二〇二〇年東京オリンピックにニア中央新幹線は間に合わないそうです。それまでに間に合わせないといけないものは？継続図書の完結？電子書籍の商品開発？(江)

▼数年たてば、今年の猛暑はよい思い出となるのでしょうか。つい先日、二〇二〇年東京オリンピック開催のうれしいニュースがありました。その頃の夏を想像すると…。今年以上の気温の上昇は勘弁です。(I)

▼表紙図版・ロウケツ染めの屏風「麒麟」「鳳凰」(鶴巻鶴一作・京都工芸繊維大学美術工芸資料館蔵)／『正倉院染織品の研究』より

■定期購読のご案内■

『鴨東通信』は年4回(4・7・9・12月)刊行しております。

代金・送料無料で刊行のつどお送りいたしますので、小社宛お申し込みください。バックナンバーも在庫のあるものについては、お送りいたします。詳細はホームページをご覧ください

おうとうつうしん

鴨東通信 四季報 No.91

2013(平成25)年9月30日発行

発行 株式会社 思文閣出版

〒605-0089

京都市東山区元町355

tel 075-751-1781

fax 075-752-0723

e-mail pub@shibunkaku.co.jp

http://www.shibunkaku.co.jp

表紙デザイン 鷺草デザイン事務所

正倉院 染織品の研究

尾形充彦著

【10月刊行】

宮内庁正倉院事務所の研究職技官として、三五年にわたり正倉院染織品を熟覧調査・研究してきた著者による、研究成果の集大成。



内 容

- 第1章 聖武天皇の時代の正倉院の染織品
- 第2章 正倉院の染織
- 第3章 正倉院裂の研究
- 第4章 花唐草獅子文綾について
- 第5章 犀目文錦の研究
- 第6章 正倉院の大幡
- 第7章 裂地としてみた正倉院の調施
- 第8章 古代織物の織技の研究について―正倉院の錦を中心にして―
- 第9章 正倉院の花氈と文様
- 【3】正倉院の染織品の保存と技術
 - 第1章 正倉院の染織品の整理
 - 第2章 正倉院裂の復元模造―小石丸種の蚕の繭を用いて―
 - 第3章 正倉院の絹織物の保存科学
 - 第4章 正倉院の染め色
- 【4】正倉院以外の染織品の調査・研究
 - 第1章 吐魯番阿斯塔那古墓出土の絹織物
 - 第2章 藤ノ木古墳出土の組紐について
 - 第3章 鶴巻鶴一博士のロウケツ染め

▼B5判・四一六頁／定価二、〇〇〇円

おがたあつひこ……一九五四年京都市生。京都工芸繊維大学大学院繊維学研究科修士課程修了。現在、宮内庁正倉院事務所保存課整理室長。

正倉院宝物に学ぶ

奈良国立博物館編

宮内庁正倉院事務所や東大寺・奈良国立博物館等の研究者が、正倉院研究の現在、八世紀の東アジア文化、宝物の保存・伝承の3テーマで報告・討論。

▼四六判・四三八頁／定価三、一五〇円

正倉院宝物に学ぶ2

奈良国立博物館編

シリーズ第2弾。本書では二〇〇八―一〇年の正倉院学術シンポジウム「正倉院展60回その歴史と未来」「皇室と正倉院宝物」「正倉院宝物はどこで作られたか」の3テーマを収録。

▼四六判・三四八頁／定価二、六二五円

正倉院展六十回のあゆみ

奈良国立博物館編集・発行

秋の風物詩、正倉院展六十回の歩みを、各回の主な出陳宝物の図版や特徴・エピソード・出陳一覧などのデータと、各分野の研究者によるエッセイでたどる。

▼A4判・二八六頁／定価三、一五〇円

上村六郎染色著作集〔全6巻〕

上村六郎著

日本における染色学界の大先達である著者の永年にわたる研究の集大成。現代染織家にとっても必須の書。

▼A5判・平均五〇〇頁／揃定価四〇、四二五円

古文化財の科学

山崎一雄著

古文化財の科学的研究の第一人者による成果。正倉院宝物の調査、装飾古墳等の諸報告。

▼A5判・三八〇頁／定価六、六一五円

法然上人絵伝の研究

中井真孝著

著者の法然上人絵伝の研究を集大成。知恩院本『法然上人行状絵図』の成立、絵伝諸本の個別研究をはじめ、専修念仏に先立つ百万遍念仏の歴史的展開を考察した2論文、古代仏教に関する論考4編を含む、合計19編。法然上人伝記研究の基本文獻。

第一部 法然上人絵伝の系譜

「法然伝」研究二題

法然上人絵伝の研究

第二部 法然上人絵伝の個別的研究

「伝法絵」の善導寺本と国華本

「法然上人伝記絵詞」(琳阿本)の作者と成立

「法然上人伝絵詞」(弘願本)について

「拾遺古徳伝絵」について

「法然上人行状絵図」成立私考

第三部 『法然上人行状絵図』をめぐる諸問題

法然諸伝に見える遊女教化譚

「法然上人行状絵図」と『法然上人伝記』(九巻伝)

「法然上人行状絵図」所収の太政官符

「法然上人行状絵図」の書誌

「法然上人伝記」(九巻伝)の成立について

第四部 百万遍念仏考

念仏結社の展開と百万遍念仏

藤原頼長の百万遍念仏

第五部 古代仏教の諸相

僧尼令の法的起源

甲賀宮・甲賀寺と近江国分寺

平安初期の神仏関係

祇園社の創祀と牛頭天王

なかいしんこう：一九四三年滋賀生。現在、佛教教育学園理事長。

【9月刊行】 ▼A5判・四七〇頁／定価九、九七五円

新訂 法然上人絵伝

中井真孝校注

『法然上人行状絵図』(国宝)の詞書を、著者の法然伝研究の成果をもとに、新たに校訂を施した本文と、語注によって提供する平成版定本。

▼A5判・四八六頁／定価二、九四〇円

法然伝と浄土宗史の研究

中井真孝著

思文閣史学叢書

都市的な顔と田舎的な体具有する浄土宗の性格が形成された過程を「法然上人伝」「中世浄土宗寺院」「近世本末関係」を軸に解明する論集。

▼A5判・三二八頁／定価九、二四〇円

法然伝承と民間寺院の研究

平祐史著

日本各地の民間寺院に伝わる開創・宗祖伝承や地名、史料等の考察を通じ、歴史民俗と浄土教学史という双方の立場から、民間寺院における近世化の実態に迫る。

▼A5判・四四四頁／定価九、四五〇円

権者の化現

天神・空也・法然

今堀太逸著

佛教大学鷹陵文化叢書

日本国の災害と道真の霊・六波羅蜜寺の信仰と空也・浄土宗の布教と法然伝の3部構成で、仏・菩薩が衆生を救うためにこの世に現れた姿について明かす。

▼四六判・三二二頁／定価二、四一五円

名庸集 [全3巻]

中本大編

(立命館大学文学部教授)

影印と解題

寛永文化の根本史料『隔黄記』にその記述がみられる幻の史料『名庸集』。今まで全く知られていなかった『名庸集』の内容は、室町時代五山禅林の学僧が頻繁に用いた『排韻増広事類氏族大全』を敷衍したかのような「人名引き百科辞書」といえ、人名は三百四十名におよぶ。

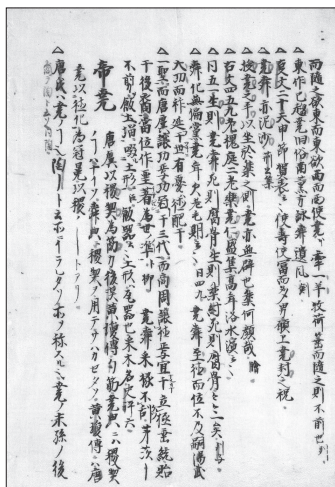
本書は信多純一氏(志水文庫)旧蔵本の全丁とあわせて、『名庸集』の一部であった『燈分集』(国立国会図書館所蔵)の影印を収録し、中世から近世初期にいたる文学史・歴史・美術史などの研究に資する。

第二巻 名庸集 (影印)

第三巻 燈分集 (影印)

解題(菊隠叢について)

『名庸集』の書誌／『燈分集』について／『名庸集』の編者／『名庸集』の別本／後水尾院と寛文年間の五山禅林文壇



[影印]

【9月刊行】

▼A5判・総一二八二頁／定価三九、九〇〇円

増補・改訂

兵範記人名索引

兵範記輪読会編

【10月刊行予定】

輪読会発足より蓄積された研究成果を人名索引として集成した初版を増補改訂。(増補)史料大成本を底本とし、男子の部と女子の部の2部構成よりなり、人名項目のもとに掲出年月日と原文表記を掲げ、原本の情報を盛り込む。増補改訂にあたり、採録人名項目四千二百、のべ三万件以上を再検証し、あらたに通称・異称名索引をくわえた。古代・中世史研究者必携の一書。

兵範記輪読会

一九八〇年発足、代表・杉橋隆夫(立命館大学文学部特任教授)

▼A5判・五一〇頁／定価九、四五〇円

禁裏・公家文庫研究 第四輯

田島公編

▼B5判・四〇四頁／定価九、六六〇円

近世の禁裏文庫所蔵の写本や、公家の語文庫収蔵本に関する論考・史料紹介・データベースを収載するシリーズの第四輯。今回は柳原家旧蔵本、陽明文庫所蔵資料の目録の翻刻も収録。

【既刊】

第一輯 ▼B5判・三九〇頁／定価二〇、二九〇円

第二輯 ▼B5判・四〇六頁／定価二〇、二九〇円

第三輯 ▼B5判・四九六頁／定価二二、三九〇円

近世妙心寺建築の研究

平井俊行著

京都府教育庁文化財保護課の修理技術者として、妙心寺建築物の保存修理に携わるなかで積みかさねてきた研究をまとめた一書。

臨済宗妙心寺派本山の個々の建築について、本山や塔頭に残る中世・近世の古文書や棟札の解説、実測のみならず、それぞれの建造物の行事での利用状況まで分析し、近世妙心寺建築成立の意義を検討する。

内 容

- 第1章 本書の概要
- 第2章 妙心寺の沿革
- 第3章 序論
- 第4章 法堂―天正・明暦期の普請文書と臨済宗最大教団への道―
- 第5章 仏殿―文化・文政期における再建の目的とその結果―
- 第6章 山門―「山門閣」の意味と山門の活用―
- 第7章 大方丈―独立した本山施設と新行事の創造―
- 第8章 庫裏―利便性の追求と役僧の変化―
- 第9章 浴室―正面の意匠保全と施浴の仕組み―
- 第10章 結語
- 資料編 法堂普請銀之拂帳 風呂屋普請萬帳

ひらい・としゆき：一九五九年東京都生。京都工芸繊維大学大学院修士課程修了。博士（工学）。京都府教育庁指導部文化財保護課建造物担当課長。

【9月刊行】

▼B5判・三五六頁／定価九、九七五円

神仏習合の歴史と儀礼空間

嵯峨井建著

日本宗教史の基本位置にある神道と仏教との関わりを、祭祀・法会の空間である神社・寺院の儀礼空間を視点に論じ、神仏習合の実態を明らかにする。

▼A5判・四二八頁／定価九、〇三〇円

大工頭中井家建築指図集 中井家所蔵本

谷直樹編著

江戸幕府の京都大工頭を代々勤めてきた中井家に伝わる建築指図をまとめる。図版は五一七点を大判で収録し、解説を付した。

▼B4判・三六〇頁／定価一八、九〇〇円

京・近江・丹後大工の仕事 近世から近代へ

建部恭宣著

寺院造営における大工の仕事、町大工の構成と作事棟梁制度の変遷、幕末の藩士住居の図面と用材など、史料の精査に基づいて大工活動の実態と近代化への歩みを考察する。

▼A5判・二七〇頁／定価五、七七五円

近世京都の町・町家・町家大工

日向進著

近世における京都町家の形成と展開の過程を事例に、町家が住居形態として一定の類型を保持し、存続してきた背景としての建築的、技術的、社会的、都市的な要因を解明する。

▼A5判・三四〇頁／定価八、一九〇円

阪神・淡路大震災と歴史的建造物

加藤邦男編

大地震による建築物被害のうち歴史的建築物の被害状況を把握し、文化財建造物の将来にわたる保全、利活用における技術方策と環境の歴史的文化的価値の問題を再検討する。

▼B5判・二八〇頁／定価八、一九〇円

幕末期の老中と情報

佐藤隆一著

水野忠精による風聞探索活動を中心に

【10月刊行予定】

水野忠精を題材とした老中の情報収集を軸に、同時代の他の事例も交えて、幕末期の老中による政治情報収集の実態とその情報内容、さらにはこれらの扱われ方を実証的に分析することで、基本的な老中の情報収集ルートの枠組を明らかにする。悪戦苦闘と挫折をくり返しながらも国政を支え続け、結果的には敗者となった水野忠精が幕閣の政治活動にも、明治新政府樹立への踏み台としての役割を認め、一定の歴史的評価を与える。

内 容

序 章 言葉としての「情報」と「風聞」「風説」

第1章 老中と情報に関わる諸問題

第2章 島津久光卒兵上京・江戸出府に関わる情報収集

第3章 將軍家茂上洛をめぐる情報収集

第4章 攘夷・鎖港問題をめぐる情報収集

第5章 元治の庶政委任と老中の往復書翰

第6章 禁門の変に関わる情報収集

第7章 長州藩・天狗党・外交問題に直面する幕閣と情報

第8章 水野忠精老中罷免をめぐる諸問題

第9章 彦根・土浦両藩とオランダ風説書

さとう・りゅういち：一九五六年東京都生。青山学院大学大学院文学

研究科史学専攻博士課程単位取得済退学。現在、青山学院高等部教諭。

▼A5判・五〇〇頁／定価九、九七五円

明治維新期の政治文化

佐々木克編

京都大学人文科学研究所の共同研究「明治維新期の社会と情報」の成果。政治文化」という視点から、明治維新期の諸問題にアプローチを試みた一書。

▼A5判・三九〇頁／定価五、六七〇円

幕藩制国家の成立と対外関係

加藤榮一著

思文閣史学叢書

幕藩権力がどのような国際的環境のもとに国家支配の枠組を形成したか。東インド会社との関係史を基軸に、国際社会の変革の過程の中に捉えなおす。

▼A5判・四八四頁／定価九、二四〇円

阿蘭陀宿海老屋の研究

片桐一男著

オランダ商館長や通詞の定宿海老屋の史料から、「人」「物」「情報」の通過点であった阿蘭陀宿の目的・機能・史的意義を探る。村上天文書の翻刻も収録。

▼A5判・総八五〇頁／定価一七、八五〇円

岩倉具視関係史料

〔全2巻〕

佐々木克・藤井讓治・三澤純・谷川穰編

『岩倉公実記』編纂時に利用されたものの最も主要な文書（一七二〇点）。説に変更を迫る多数の未公開書簡や書類を含む史料群を完全活字化。

▼A5判・総一一〇八頁／定価二五、二〇〇円

岩倉使節団の比較文化史的研究

芳賀徹編

比較文化史的視点から岩倉使節団を論じた共同研究。編者をはじめ、日米英の8名が日米英仏伊における使節団を論じる。

▼A5判・三五八頁／定価六、八二五円

住友の歴史 上巻

朝尾直弘監修・住友史料館編集

【8月刊行】

近世初頭から銅の精錬を業とし、その後金融・貿易などをも手がけ、近代の財閥につながる豪商の一典型である住友の歴史をわかりやすく紹介。連綿と受け継がれる住友精神の源泉がここにある。

【下巻は二〇一四年夏刊行予定】

内 容

- 第1章 創業者の肖像
- 第2章 東アジアの銅貿易と住友
- 第3章 火と水と土石とのたたかい
- 第4章 鉱山都市と積出港市
- 第5章 銅貿易を支える仕組み
- 第6章 銅の生産と関連諸産業
- 第7章 住友の江戸進出



上：住友が完成させた南蛮吹(鼓銅図録・住友史料館蔵)
下：近世別子銅山の採掘現場(別子銅山絵巻・同上)



▼四六判・二八六頁／定価一、七八五円

住友史料叢書

〔既刊27冊・第5期刊行中〕

小葉田淳・朝尾直弘監修／住友史料館編集

1万数千点にのぼる近世鉱山関係史料のうち、重要で継続する記録類を中心に翻刻。各巻とも改題と索引を付す。

▼A5判・平均四〇〇頁／既刊予定価二六一、九七五円
《最新第27回配本…銅座方要用控三 定価九、九七五円》

貨幣と鉱山

小葉田淳著

日本経済史研究の泰斗が中世から近世にいたる貨幣と鉱山に関する論考を集成。〔内容〕近世、銀・金の海外流出と銅貿易の動向／日本中近世の貨幣事情／領国武田氏の幣制と家康の幣制の確立 ほか全11編

▼A5判・三〇〇頁／定価八、一九〇円

日本銅鉱業史の研究

小葉田淳著

金銀山の史的的研究を集成した、『日本鉱山史の研究』（学芸院賞、『続日本鉱山史の研究』につづく本書には、足尾・面谷・別子など日本を代表する鉱山の個別の史的調査研究に加え、付篇として産銅に関する近世の銅貿易と鑄銭についての論稿を収めた。

▼A5判・八六八頁／定価一九、九五〇円

近世鉱山社会史の研究

荻慎一郎著

鉱山社会史研究の視点から、従来の研究で欠落していた支配・経営構造、技術受容と生産体制、労働組織、鉱山法や住民の社会生活などの実態を大葛金山・院内銀山などの一次史料を通して明かす先駆的な業績。第7回高知出版学術賞受賞。

▼A5判・六四〇頁／定価一三、四四〇円

近世琵琶湖水運の研究

杉江進著

古来より重要な流通路であった琵琶湖水運の近世について、堅田の変貌、後背地との関係から分けられる三地域の対抗、航行と船支配の関係という三視点を基軸に、より歴史的な視点からその全体像や特徴を描き出す。

▼A5判・四六四頁／定価九、四五〇円

近世中国朝鮮交渉史の研究

松浦章著

〔10月刊行予定〕

近世中国と朝鮮国との交渉について、朝鮮から北京に赴いた赴京使による定期的な外交交渉と、漂着船や交易船による不定期な海を介した交渉の両面から考察する。付録として、天理大学附属天理図書館蔵の「漂人問答」を全文影印掲載。

序章

第一部 朝鮮使節の北京への道程

第一章 袁崇煥と朝鮮使節

第二章 朝鮮使節の記録に見る北京の会同館

補論 朝鮮使節が宿泊した北京の智化寺

第三章 朝鮮使節の客死

第二部 朝鮮情報から見る中国

第一章 明朝末期における朝鮮使節の見た北京

第二章 清代朝鮮使節の台湾情報・林爽文の乱

第三章 朝鮮国に伝えられた康熙帝の訃報

第四章 乾隆太上皇の死と朝鮮使節

第三部 中国漂着朝鮮船と朝鮮漂着中国船

第一章 明代中国に漂着した朝鮮船

第二章 中国船の朝鮮漂着

《影印》漂人問答 附 思漢吟咏

第三章 清末上海沙船の朝鮮漂着に関する一史料

第四部 黄海の交渉史

第一章 天啓期における毛文龍の皮島占拠

第二章 康熙盛京海運と朝鮮賑濟

第三章 清末山東半島と朝鮮仁川との帆船航運

終章 近世中国と朝鮮国との交渉史の意義

▼A5判・三二〇頁／定価六、三〇〇円

ま(つ)ら・あきら……一九四七年生。関西大学文学部教授。

近世東アジア海域の文化交渉

松浦章著

海によって隔てられた東アジア諸地域間の交流は、波濤を越えた船の往来によって支えられていた――。清代帆船やその後に登場した汽船に乗って海を渡った人・物・書籍や文化をとりあげ、中国・日本・朝鮮・琉球などの人々の交流の諸相を明かす。

▼A5判・四七二頁／定価九、四五〇円

朝鮮通信使の研究

李元植著

通信使の訪日における交歓、すなわち筆談と詩文唱和の文事こそ両国の善隣友好を支えた基調であるとの視点から、数多くの貴重な文獻・史料を検証し、交歓の実態を明らかにすると同時に、兩國文化の異同・相互の認識と理解、などについて究明する。

▼A5判・七三六頁／定価一五、七五〇円

漂流記録と漂流体験

倉地克直著

一八三〇年、岡山を出航した神力丸は、2か月あまり漂流したのちフィリピンに無人島に流れ着いた。研究篇ではその漂流記録を丁寧に検討、史料篇では関係記録を翻刻掲載する。

▼A5判・三五二頁／定価七、八七五円

一八世紀日本の文化状況と国際環境

笠谷和比古編

日本の18世紀の文化的状況はいかに形成され、それらは東アジア世界、また西洋世界までふくめたグローバルな環境下で、いかに影響を受けつつ独自の展開を示したか。多角的にアプローチした国際日本文化研究センターでの共同研究の成果23篇。

▼A5判・五八二頁／定価八、九二五円

「封建」・「群県」再考 東アジア社会体制論の深層

張翔・園田英弘編

東アジアの社会体制(あるいは統治機構)を表す「封建」と「郡県」という伝統的大概念を多角的に検討し、その論理的枠組や時代的要請による理論的發展の構造を解明。

▼A5判・四二二頁／定価六、八二五円

写しの力

創造と伝承のマトリクス

島尾新・彬子女王・亀田和子編 【10月刊行予定】

二項対立的に「オリジナル」と「コピー」を捉え、模本を原本に劣るものとして考えるのではなく、日本美術における模写の伝統をさまざまな角度から再検討する試み。ハワイ大学で行われた国際シンポジウム『Utsushi』の成果の10篇。

第一部 中国への憧れを写す

第一章 日本文人画における間画像性と写し (ポール・ペリー)

第二章 文人理念と「写し」のジレンマ (亀田和子)

—— 中林竹洞筆「蘭亭図巻」を例として ——

第三章 近代陶磁と特許制度 (前崎信也)

—— 清風興平家から見た「写し」をめぐる京焼の十九世紀 ——

第二部 画像の伝承としての「写し」

第四章 画像と写し (ジョシユア・モストウ)

—— 「伊勢物語絵」と俵屋宗達 ——

第五章 騎虎鍾馗の画像の伝承と変容 (永田真紀)

第六章 室町水墨画における「写し」 (畑靖紀)

—— 図様と表現の観点から ——

第七章 富士三保松原図の図様伝播 (山下善也)

—— 狩野派を中心に ——

第三部 「写し」の意味と役割

第八章 海を渡った法隆寺壁画 (彬子女王)

—— 西洋における「うつし」の役割 ——

第九章 写しの文化における舞台表現の伝承 (松葉涼子)

第十章 写しの文化 —— 「オリジナル主義」再考 —— (島尾新)

▼ A5判・二六〇頁／定価四、二〇〇円

風俗絵画の文化学Ⅱ 虚実をうつす機知

松本郁代・出光佐千子・彬子女王編

制作に関わった人々の複雑に絡み合う視線の交錯を文化的に考察。そこにあられた「機知」——虚実を往来する機微や感性の「かたち」——を明かす15篇。

▼ A5判・四五〇頁／定価七、三五〇円

宗達伊勢物語図色紙

羽衣国際大学日本文化研究所伊勢物語絵研究会編

現存する59面のすべてをカラー、原寸大で掲載し、詳細な個別解説を付す。新たな知見を含め宗達伊勢物語図色紙の全体像と特徴を明らかにした一書。

▼ B4判変型・一二〇頁／定価一九、九五〇円

没後二二〇年 蕪村

逸翁美術館・柿衛文庫編

南画・俳画・嫁入手・扇面・草稿・短冊・書簡など、新出作品もふくめ全一七六点を解説を付してカラーで収録。書簡については巻末に翻刻・解説を併載。

▼ A4判・二二〇頁／定価二、三二〇円

田能村竹田基本画譜 [全2巻]

宗像健一編著

図版篇には厳選された一四〇点の作品を大型図版で、解説篇には総論と基本作品の詳細を極めた個別解説のほか、題詩・落款・印譜・年譜などを収録。

▼ B4判変型・総三九八頁／定価二九、四〇〇円

室町水墨画と五山文学

城市真理子著

室町時代の詩画軸における詩と絵画の関係、禅林での制作行程、禅僧の文人意識の絵画への反映を論じ、詩文僧による〈詩画軸制作システム〉を解明。

▼ A5判・三三六頁／定価六、三〇〇円

近代の「美術」と 茶の湯 言葉と人とモノ

依田徹著

〔7月刊行〕

明治維新で価値を落とした茶道具は、どのようにして美術作品として再評価されるようになったのか？ 千利休と岡倉天心に注目し、近代美術史の視点から、明治以降の茶道具の評価を捉え直す。美術作品と茶道具の境界線を問う、革新の一書。

◆ 内容 ◆

第1部 茶道具評価の変容

第1章 日本美術史における茶の湯

第2章 文化財指定と茶道具―「美術」と趣味世界の境界―

第2部 茶の湯の文化価値の創出

第3章 明治期の文化論と茶の湯―西洋文化と東洋文化の相克―

第4章 「茶の湯」の成立と構造―岡倉覚三の美術論との関係から―

第3部 理論整備と作家制作

第5章 「美術」と「茶の湯」の仲立ち

―今泉雄作と陶磁器研究会の茶道具論―

第6章 「美術」作家による茶道具制作―大正期の板谷波山と香取秀真―

第4部 茶道具の「美術作品」化

第7章 近代の千家道具―千家と楽焼・永楽焼―

第8章 茶碗イメージの変遷―《不二山》《卯花墙》《大黒》―

第5部 「芸術家」利休の誕生

第9章 日本美術史における茶人―小堀遠州・松花堂昭乗から千利休へ―

第10章 「茶の本」の影響―利休再生と美術論―

第11章 戦後の茶道具論―定式化と懐疑―

（付表）総合年表・茶道具文化財指定年表

よだとおる：一九七七年山梨県生まれ。東京芸術大学大学院美術研究科芸術学専攻修了。博士（美術）。元さいたま市大宮盆栽美術館学芸員。

▼A5判・三三二頁／定価六七二〇円

近代茶道の歴史社会学

田中秀隆著

近代国家の文化的アイデンティティの生成構面から、茶道が日本の「伝統文化」として認知されるようになった過程を考察する。

▼A5判・四五四頁／定価六、八二五円

近代数寄者のネットワーク

齋藤康彦著

茶の湯を愛した実業家たち 従来顧みられなかった茶会記録である『茶会記』のデータ分析を通して政界、官界・実業界を横断するネットワークを描出する。

▼A5判・三〇八頁／定価四、二〇〇円

京都 伝統工芸の近代

並木誠士・清水愛子・青木美保子・山田由希代編

「海外との交流」「伝統と革新」「工芸と絵画」「伝統工芸の場」の視点から、様々なトピックスや人物にまつわるエピソードを取り上げ概観する。

▼A5判・三〇〇頁／定価二、六二五円

岡倉天心の比較文化史的研究

清水恵美子著

ボストンでの活動と芸術思想 ポストンでの活動に焦点をあてる。著者がアメリカで行った文献資料調査による新出資料なども駆使し、複眼的な視座からアプローチ。

〔二〇二二年度芸術選奨文部科学大臣新人賞 受賞〕

▼A5判・五四八頁／定価一、二三五円

近代日本における書への眼差し

高橋利郎著

日本書道史形成の軌跡 毛筆の文字資料が、近代に「書」として位置付けられていく過程を、書道史に関する出版、宝物調査や展覧会の列品、また文化財関連の法令から探る。

▼A5判・三〇四頁／定価五、〇四〇円

老農・中井太一郎と

大島佐知子著 農民たちの近代

農業近代化の過程で重要な役割を果たした「老農」たち。その一人、除草器「太一車」で知られる中井太一郎の技術・思想や全国巡回をしたライフヒストリー、彼と歩んだ組織・団体に集う明治の農民群像を実地調査によって明かす。

第一章 前半生と地租改正反対運動

太一郎の前半生／久米・八橋郡地租改正反対運動と太一郎／地租改正反対運動から農事改良へ

第二章 明治前期鳥取県における農事改良

太一郎の農業技術と風土／鳥根県立植物試験場の創立／倉吉農学校の創立／林遠里の招聘と太一郎／林遠里法に対する太一郎の見解

第三章 太一郎の農業技術体系

太一郎の農業技術の基底にあるもの／太一郎法の形成／全国への発信／太一郎の自然観・農業観

第四章 太一郎の技術普及(一)

田打車から太一車へ／太一車と正条植普及の形態／全国巡回と太一車・正条植の普及

第五章 太一郎の技術普及(二)

巡回後半期への出発／明治三年の巡回／明治三二年の巡回／短冊形苗代・共同苗代の強制と反対運動

第六章 帝国農家一致結合と太一郎

「種苗交換同盟」から「帝国農家一致結合」へ／軋機となった明治二八年／急速な拡大と活動の変化／「帝国農家一致結合」を支えた人々

終章 太一郎の晩年

日清・日露戦争に対する太一郎の視線／鳥取県農会名誉会員および県立倉吉簡易農学校教師としての活動／中井家の農業経営／太一郎の最晩年

……
おおしま・さちこ……一九三六年鳥取県生。関西農業史研究会所属。
【10月刊行予定】 ▼A5判・三八〇頁 定価七、八七五円

中近世農業史の再解釈

伏見元嘉著

戦国末期伊予の軍記『清良記』を分析。著者および成立年代を確定。日本最古の農書とされる第7巻「親民鑑月集」の位置づけを明かす。

▼A5判・四二四頁／定価八、一九〇円

一九世紀の豪農・名望家と

福澤徹三著

中核的豪農と一般豪農の経営レベルの比較、金融活動の分析を中心に、畿内・信濃の地域間比較も加え、その生業・営為を近世・近代を通じて明かす。

▼A5判・三三〇頁／定価六、三三〇円

日本産業技術史事典

日本産業技術史学会編

明治維新以降、めざましい発展を遂げてきた近代化の歩みを支えた産業技術の変遷を跡づけ、日本の産業技術史を俯瞰する。

▼B5判・五五〇頁／定価二二、六〇〇円

近世後期瀬戸内塩業史の研究

山下恭著

塩業と醬油業における開発・経営・塩専売制・流通問題を分析し、塩業における燃料問題と労働条件を数量的に解明した基礎的研究。

▼A5判・三〇〇頁／定価六、三〇〇円

日本近世染織業発達史の研究

貫秀高著

近世において大規模産業として発達した推移を、生糸の輸入状況や技術の発達などの関連において、詳しく分析した力作。

▼A5判・七八〇頁／定価二二、六〇〇円

近代京都の施薬院

八木聖弥著

【9月刊行】

奈良時代に貧窮病者を救済するために設置された施薬院。明治維新から大正にかけて、施薬・施療のために人生をかけた安藤精軒。貧困者への医療普及を目指した精軒がとった手段が「施薬院」の復興であった。一個人の施療場から始まった行動は、多くの人々の協力を得て慈善事業として拡大されていった。「施薬院」を中心として、京都医界の歴史を描き出し、近代化していく日本の一側面を考証する。

内 容

序——施薬院再興前史——

第一章 東三本木治療場の創設

安藤精軒の生い立ち

北方での精軒

京都での精軒

水西荘での施療

第二章 施薬院の再興

京都医会の創設

施薬院設立協会の発足

保徳院での施療

施薬院協会への移管

第三章 施薬院の発展と終焉

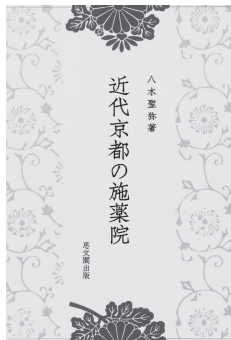
入信院での施療

入信院南隣地への移転

聚楽病院跡への移転

施薬院の閉鎖

やぎせいや…一九五八年京都市生。京都府立医科大学准教授。



▼A5判・三二〇頁／

定価三、六七五円

京都療病院お雇い医師シヨイベ
森本武利編著／酒井謙一訳
シヨイベの生涯をはじめ、ほかのお雇い外国人達との交流や居留地での生活から明治初期の京都の風俗にいたるまでを、生き生きとよみがえらせる。

緒方惟準伝

緒方家の人々とその周辺

中山沃著

自叙伝「緒方惟準先生一夕話」を軸として著者が博搜した資料と共にその生涯と交遊を詳述。幅広く網羅された本書は幕末・明治初期の医学界をも物語る基本図書。

▼A5判・一〇一八頁／定価一五、七五〇円

東大医学部初代総理池田謙斎
池田文書研究会編 池田文書の研究「全2冊」

東京大学中樞部・陸軍軍医部・宮内省侍医として関係のあった各官家、同僚侍医、また患者としての華族や高級官僚などによる謙斎宛書簡を上・下2分冊で収録。医学史の分野のみならず政治史や官廷史に寄与する資料である。

▼A5判・(上)三五〇頁／定価七、一四〇円
(下)四一四頁／定価八、一九〇円

近代日本高等教育体制の黎明

田中智子著

交錯する地域と国とキリスト教界

各地域の高等教育体制の展開過程を、府県という地域行政主体、文部省という国の行政主体、伝道を志すキリスト教界、という三勢力の交錯のうちに描く。高等教育史を府県・国・民間勢力の相互関係史として再構成する一書。

▼A5判・四四八頁／定価七、三五〇円

近代日本と地域振興
京都府の近代

高久嶺之介著

交通体系の変化・新技術と議会の導入・地域の人々の活動の問題等を踏まえ、政治行政史と社会史を組み合わせつつぶさに描出。

▼A5判・三六四頁／定価六、八二五円

近代日本の歴史都市

高木博志編

古都と城下町

「古都」京都・奈良、「加賀百万石」の金沢、伊達政宗の仙台など、都市は実にさまざまな歴史性をまとうている。しかしそれらは、近代化の過程で発見され、選り取られたイメージであった。本書は「都市の歴史性」をキーワードに、分野を超えた研究者たちが参加した京都大学人文科学研究所・共同研究「近代古都研究」班の成果。

I 古都—京都・奈良・伊勢

修学旅行と奈良・京都・伊勢（高木博志） 郡区町村編制法と京都（小林文広） 創建神社の造営と近代京都（清水重敦） 一八九三年オーストリア皇族の来京（高久嶺之介） 明治期「洛外」の朝廷由緒と「古都」（谷川稜） 幸野棟嶺《秋日田家図》について（高階絵里加） 橋梁デザインに見る風致に対する二つの認識（中川理） 京都の風致地区指定過程に重層する意図とその主体（中嶋節子） 歴史を表象する空間としての京都御所・御苑（河西秀哉） 権門寺社の歴史と奈良町の歴史との間（幡鎌一弘） 平城神宮創建計画と奈良（黒岩康博） 『神都物語』（ジョン・ブリー）

II 城下町—金沢・仙台・尼崎・岡山・三都

「城下町金沢」の記憶（本康宏史） 誰が藩祖伊達政宗を祀るのか（佐藤雅也） 武士と武家地の行方（岩城卓二） 帝国の風景序説（小野芳朗） 高等学校制度と地方都市（田中智子） 近代「三都」考（丸山宏）

【8月刊行】

▼A5判・六〇〇頁 定価八、一九〇円

近代京都研究

丸山宏・伊從勉・高木博志編

京都という都市をどのように相対化できるのか、普遍性と特殊性を射程に入れ、分野を超えた研究者達が参加した京都大学人文科学研究所共同研究の成果。

▼A5判・六二八頁／定価九、四五〇円

みやこの近代

丸山宏・伊從勉・高木博志編

歴史都市・京都は、近現代に大きく変わったまちであった。京都の根本問題を見通す試みの85篇。2年にわたり『京都新聞』に連載されたものを再構成。

▼A5判・二六八頁／定価二、七三〇円

北垣国道日記「塵海」

塵海研究会編

京都府知事・北海道庁長官などを歴任した明治期の地方官、北垣国道の日記を翻刻。

▼A5判・六五二頁／定価一〇、二九〇円

文人世界の光芒と古都奈良

大和の生き字引・水木要太郎

久留島浩・高木博志・高橋一樹編

近代奈良の水木コレクションを分析。日本史学・考古学等を横断する一書。

▼A5判・五〇八頁／定価八、一九〇円

歴史のなかの天皇陵

高木博志・山田邦和編

近代までの陵墓の歴史を易しく説く。京都アスニーでの公開講演に、コラム・座談会を加える。

▼A5判・三四〇頁／定価二、六二五円

中華民国の誕生と

大正初期の日本人

曾田三郎（広島大学名誉教授）著

「中華民国」の誕生は同時代の日本人に

大きな衝撃を与えた――

中国・日本双方の報道を通して大正初期の日本を見てゆくと、当時の日本・中国間における緊密な関係性がみえてくる。大正初期、日本の国会では中国のあり方・対中国政策が盛んに議論され、その如何が世論を動かした。臨時約法を始めとする中華民国誕生を取り巻く諸問題を通して、大正初期の日本人を捉え直す。

前著『立憲国家への始動』からさらに視野をひろげ、中華民国の誕生における日本と中国の関わりを紐解く。

序 論

第1章 中華民国臨時約法の制定と日本人法学者

第2章 中華民国臨時約法公布後の中国政治と日本人

第3章 中華民国約法期の袁世凱政権と日本人

第4章 中国の帝制復活をめぐる日本の政策と世論

第5章 中国の参戦問題と日本の世論

第6章 南北問題をめぐる日本の政策と中国の新聞報道

第7章 中国の南北問題をめぐる日本のジャーナリズムと学者たち

結 論



〔7月刊行〕

▼A5判・三三八頁

定価六、八二五円

立憲国家中国への始動

曾田三郎著

明治憲政と近代中国

従来の単線・単純な辛亥革命史研究の枠組みを打開すべく、立憲国家中国の形成という観点から叙述する中国近代史。

▼A5判・四〇〇頁／定価八、四〇〇円

韓国「併合」前後の教育政策と日本

本間千景著

佛敎大学研究叢書

韓国「併合」前後の期間の修身敎科書への影響や敎員の養成・日本人敎員の配置など、現地における学校敎育を、多彩な史料に基づき明らかにする。

▼A5判・三〇〇頁／定価五、八八〇円

地域社会から見る帝国日本と植民地

松田利彦・陳延淩編

朝鮮・台湾・満洲

「支配される側」の視点と「帝国史」という視点、異なるレベルの問題に有機的関係を見いだすため、国内外の研究者が多角的に考察する。

▼A5判・八五二頁／定価一四、四九〇円

朝鮮独立運動と東アジア

小野容照著

1910-1945

在日朝鮮人留學生の組織活動、出版活動、独立運動の過程を追ひ、東アジアの社会・運動・思想状況との相互関係の中で展開した運動として捉え直す。

▼A5判・四二四頁／定価七、八七五円

古井喜実と中国

鹿雪肇著

日中国交正常化への道

これまで十分な研究がなされてこなかった古井喜実を中心として、自民党内親中派による国交正常化への軌跡、交渉の裏側を総体的に検証。

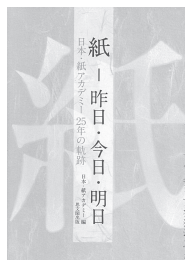
▼A5判・三五六頁／定価三、九九〇円

紙——昨日・今日・明日

日本・紙アカデミー編

日本・紙アカデミー25年の軌跡
【9月刊行】

紙の製法の確立や生産、紙のリサイクルの可能性、紙を利用したアートやデザイン、産地ごとに固有の顔をもつ和紙の製法など、紙にかかわってきた人々による、紙が生み出した文化を様々な角度から分析し、理解しようとする思いが結集した、「日本・紙アカデミー」活動25年の節目の年にふさわしい論文集。



目次

第1部 戦前から日本・紙アカデミー創設まで

和紙振興の取り組み 田村正 和紙の復興に立ち上がった文化人の活動
PC3 KYOTO (伊部京子) 東京での和紙文化振興の経緯 (辻本直彦)

第2部 日本・紙アカデミーの25年

日本・紙アカデミー組織概要 伊部京子・鈴木佳子

第3部 紙のいま、紙の明日

「技術の継承」紙の保存性と被曝した紙資料の取扱 (稲葉政満) 紙を飾る日本・増田勝彦 和紙の展覧(長谷川聡) 修復における和紙の役割について 宇佐見直治 バビロンの時代に、靱皮繊維を用いた紙は存在した? (坂本勇) 金泥経と紙 (福島久幸) 「芸術表現と紙」日本美術における紙と絵画 (五木誠士) 芸術表現と紙 (小山欽也) 表現の手段としての和紙の可能性 (並木嵐義郎) 美濃紙の芸術村(須田茂)「和紙」と「フアイバーアート」(ジョー・アール) 紙とデザイン教育(中野仁人) インクジェットプリンターを使った作品制作のためのカラーマネジメント(辰巳明久) 紙はリアルな物質である。竹尾綱「紙と化学」「和紙」と「雁皮の靱皮繊維」の化学(錦織慎徳) 紙と水(大江礼三郎) 古代紙に使われた繊維(大倉佐敏) 伝統工芸のクローバル化(藤森洋) 紙のエコロジー(岡田英三郎) 野菜の紙(木村照志) 紙の未来「紙の文化学」から考える紙の本質と未来(尾鍋史彦) 紙の明日(中西秀彦) アメリカにおける和紙(片山寛美) 固有の潜在力を有する「製紙産業」とその将来 (辻本直彦)

▼A5判・一八〇頁／定価二、一〇〇円

老僧が語る 京の仏教うらおもて

五十嵐隆明著 (総本山禅林寺第八十八世法主)

永観堂禅林寺元住職による、近代京都仏教界の内幕。第二次世界大戦時の仏教界の戦争協力と反省、「古都税」導入の動きと反対運動。医療・福祉への取り組みなど。自身の体験をふまえ、具体的にエピソードを交えて語る。



【8月刊行】

▼四六判・二三二頁／定価九四五円

仏教と癒しの文化

佛教大学国際学術研究叢書④

第22回国際仏教文化学術会議実行委員会編

佛教大学と韓国・圓光大学校とで行われた国際学術交流会議「仏教と癒しの文化」の成果6篇を収録。

【内容】

癒し文化のビジョン―仏教に現代人の治癒を問う
仏教と癒しの文化―在宅ターミナルケアの現状
病める社会の診断とその治療
日本仏教に見る救済と癒し―地蔵信仰を中心に
懺悔修業を通じる現代人の仏教教的治癒
―元曉の「大乘六情懺悔」を中心に
鎮める学習への転換

朴 相権
田中善昭
柳 聖泰
笹田教彰
金 道公
白石克己

【10月刊行予定】

▼A5判・二〇〇頁／定価一、九九五円

——思文閣グループの逸品紹介——

美の縁

び

よすが



本作品においてまず目が釘付けになるのは、表面に見える様々な色の模様である。赤、黄、緑、青などまるで絵の具で描いたように鮮やかに装飾されている。畠山は常に青銅を素材として、主に蓋のある箱をメインに創作してきた。まずは木型で原型を造り、鑄造にて成形してから、加熱と薬品による表面加飾を行う。薬品を表面に付け置く時間の差や、加熱の温度調整などで、銅の表面を錆させる。驚くべきことは、この色とりどりの模様は錆が織りなしているということである。世界でもあまり類のない手法でつくられており、観る人の心をひきつける。この全行程を畠山は全て一人でこなす。

◆ 水指 ◆

はたやま こうじ
畠山 耕治

また、畠山は一貫して、蓋物の形態にもこだわってきた。思うにそれは日本文化にとつて箱と言う物が限りなく想像力をかきたてるものが詰まっているように感じられるからであろう。

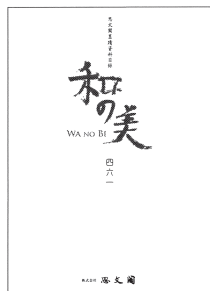
蓋をあける前の少しの不安とそれに勝る期待感。開けた瞬間に感じる、ワクワク感。蓋をあけたとき、中にあしらわれた金箔や銀箔のきらめきが一層心をときめかせる。

畠山の生まれ育った富山県の高岡市は、全国の銅器の生産額9割以上を占める。そこで育まれた美の感性が、国内のみならず世界を驚かせている。

(ぎ)やらしい思文閣・山内徳太郎

思文閣墨蹟資料目録

和の美



古書画から
近代美術まで
毎月100点の名品を
通信販売にて
お届けします。

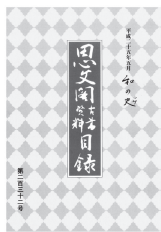
お電話もしくはホームページにてお問い合わせください。

京都市東山区古門前通大和大路東入元町 355
TEL(075)531-0001 FAX(075)531-5533
<http://www.shibunkaku.co.jp/>
info@shibunkaku.co.jp

思文閣古書史料目録

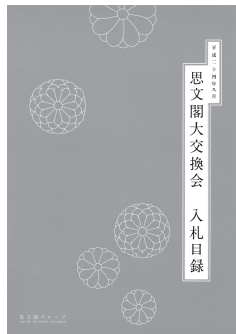
※古典籍を中心に古文書・古写経・絵巻物・
古地図・錦絵などから学術書全般に至る
まで、あらゆるジャンルの商品を取り扱っ
ております（年4回程度発行）。

※ご希望の方は、下記、思文閣出版古書部
までお問い合わせ下さい。



京都市東山区古門前通大和大路東入元町 355
TEL(075)752-0005 FAX(075)525-7155
<http://www.shibunkaku.co.jp/kosho/>
kosho@shibunkaku.co.jp

残したい、伝えたい。
思文閣大交換会



思文閣大交換会は、年四回の大入札会。
お客様の高いご見識と私どもの審美眼
への信頼で、安定して高い実績を誇っ
ています。

ご出品をご希望の方は、まず査定のお申し込みを

〒605-0089 京都市東山区古門前通大和大路東入元町 355
tel: 075-531-0001 satei@shibunkaku.co.jp
www.shibunkaku.co.jp/arts/

戸田浩二展

KOJI TODA

2013 年 10 月 6 日 - 14 日
10:00-18:00 会期中無休

この度、ぎやらりい思文閣では、関西初となる
戸田浩二の展覧会を開催いたします。
皆様のお越しを心よりお待ちしております。

ぎやらりい思文閣

京都市東山区古門前通大和大路東入元町 386
TEL(075)761-0001 gallery@shibunkaku.co.jp
www.shibunkaku.co.jp/gallery/